恋する気持ち

心愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋する気持ち

【Ｎコード】
Ｎ５９２８Ｚ

【作者名】
心愛

【あらすじ】
友達だと思っていた広樹に、突然告白された梓。
しかし梓は、恋愛経験が０で、男子と友達になっていることが奇跡というほど、男子に縁が無かった。
広樹からの告白を断った梓だが、広樹は諦めない。
様々な方法で広樹は梓にアタックするが、梓は自分の恋する気持ちになかなか気づくことができない。
しかし、ある時を境に梓は…？

何気なく書いた、普通のラブストーリーです。

opening

「俺、…梓のこと、好きになった」

「は…？」

突然の告白だった。

私は、とある高校1年生の、向井　梓。
軽く身の回りのことを話すと、私のクラスは、1年C組。で、C組は、全員が仲が良いことで有名。その中でも、私が特に仲良くしているのが、藤咲　杏花、三浦　佑介、そして、わけわからない告白をしてきた、南川　広樹の3人。
つまり、私を含めこの4人が、1つの仲良しグループってわけだ。
まあ、なぜ仲良くなったかというと、簡単な話で、最初に行った移動教室で、この4人が同じ班だったからなんだけど。

私は、生まれてから中学を卒業するまで、男子と関わったことがほとんどなかった。
正直、恋愛の類は、一切興味が無かった。
だから、今こうして、男子と仲良くしているのは、自分でも驚きなんだけど…。
でも、恋愛感情なんてこれっぽっちも無い。

なのに、広樹は…
私に告白をしてきた。

全く意味がわからない。どうしたらいいのかも。

とりあえず、私は断った。

「いや、ごめん。私、恋愛とか興味無いし。…ってか、好きとかそういうの、わかんないから。…というか、…本気でそれ言ってる？」最後は、完全に広樹を疑った。もしかして…罰ゲームとかかもしれないし。

「ちげえよ。本気だから」

そんな私の淡い期待？　を裏切って、広樹は真剣な顔で口を開いた。

そして、続けた。

「でも梓、俺のこと、嫌いじゃないでしょ？」

「まあ、そりゃ、嫌いなら仲良くなんかしてないし？」

私は、ありのまま、素直な気持ちを広樹に伝えた。

「だったら、俺にはまだチャンスあるよな！

俺、絶対、梓に俺のこと好きにさせてみせるから！！」

…そしたら、とんでもない方向へ飛んで行ってしまった。

私が！？　広樹を？　好きになる！！？

そんなわけないでしょ…。

ていうか、私、恋愛なんてわからないって言ったのに…。

そんな私の心の叫びは誰にも届かず、ここから私の人生は大きく変わっていくのだった……。

episode1　告白から1ヶ月

あの告白から1ヶ月…

「おっはよー！！」

私の悩みの種が登校してきた。

「おはよー」×たくさん

さすがC組、みんなが1人にちゃんと挨拶する。

「おはよ、梓」

そして、そいつは、私の席まで来て、私の頭に手を置きながらそう言った。

「…おはよ」

私は手を振り払いながら、ダルそうに言ってやった。

「朝から機嫌悪いねー？　相変わらず。何？　低血圧とか？」

広樹が私の顔を覗き込んでくる。

…紛れもなく、あんたのせいだけど！！

「…あのねぇ、挨拶するなら、普通にしてくれない？　いちいち触る必要ないでしょ！？」

そう、あの告白の日から、広樹は完全に開き直っているみたいだった。

好きにさせてみせる、って言ったのは、本気らしく、なんだかんだで私にかまってくる。

「何？　照れてんの？」

広樹は、笑顔いっぱいでそう言う。

…なぜそうなるのか…私には理解できない！

「はあ？　なぜ照れる必要があるの？　ったく、毎朝毎朝！！」

私は広樹に掴みかかりそうになった。

でも…
「はいはい、落ち着いてねー？」
…杏花が間に入ってきた。
「本当に相変わらず仲が良いことで」
杏花はニヤニヤしている。絶対に面白がってるだろ！！
「いや、良くない！！」
私は間髪入れずにつっこんだ。

広樹は、バレー部に所属している。
まあ、それが、とても上手いらしく、先輩の人数が少ないこともあってか、広樹は1年生のうちから試合に出ている。要は、スポーツ万能。
その上、テストの順位ではいつも30位以内には入る頭の良さで、顔も…他の人が言うには、かっこいいらしい。私はそういうの疎くてわからないけど。
だから、広樹はモテる。私にだって、それくらいはわかる。
女子から呼び出されたりするのを見るのも、よくあることだ。
なのに！　何で私のことなんか好きになるのか！？　わからないんだけど。

「あ、そうだ、梓。化学のプリントやってきた？」
…と、私の頭がぐるぐるしている時に、広樹が話しかけてきた。
「やってきたけど」
そりゃ、宿題なんだから、やってくるのは当たり前でしょ。
「ここわかった？」
広樹は、プリントを指差してそう言った。
…って言われても、見えないんだけど…。
「どこ？」
私は仕方なく、身を乗り出した。
「あー、そこ？　一応できたけど」

「見せて」
はい、と、私はプリントを渡した。
なんだかな…こういう時は、今までと変わらないんだよね、広樹の態度。
だから、余計にわけわかんない…。

「ったく、お前ら本当に仲良いな」
はあ？　と思って振り返ると、いつのまにか、佑介が来ていた。
佑介は、野球部所属で、期待の新人ってところ。よって、広樹同様、スポーツ万能。
今日も朝練だったのか、制服が少し乱れている。
「だからー…」
私は文句を言おうと思って口を開いた。
「ねえ、見て。　これ、ＧＥＴしたよ」
…が、佑介は完全スルーした。スルーは佑介の得意技だ。全く…。
「また当てたの！？　佑介運良すぎでしょ…」
杏花が、半ば呆れたような、感心したような声を出す。
もう一つの佑介の得意技は、懸賞を当てまくること。強運の持ち主なのだ。
こっちの得意技は、すごく役に立っている。
今まで、そのおかげで私たちは、いろいろなところへ行ったり、いろいろなものをもらったりしてる。
今回も、何か当ててきたみたい。
「おお。今度は何？　…ショッピングモール優待券？」
広樹が、佑介の持っているチケットを覗き込んでそう言う。
「えっ！？　それってあの、駅前に新しくできたやつだよね？　確か、開店1日前に、抽選で選ばれた人を招待するって言ってたけど…それ！？」
杏花が目を輝かせる。それもそうだよね、杏花はあのショッピング

モール超行きたがってたし。
「そう、それ。ちょうど４人までＯＫのやつだから、みんなで行こうよ」
やったー！　と、杏花が横で大はしゃぎする。
私も、杏花ほどではないけど、結構うれしい。ショッピングするの、好きだから。

「俺も行くぜー。ちょうどその日部活休みだし！」
広樹も嬉しそうにそう言った。

そういえば…あの告白の後、みんなでどっか行くの初めてだったな。
ってことは、１ヶ月どこにも行ってなかったんだ。
そりゃ、みんなのテンション上がるわけだ。

そんなこんなで、ショッピングモールに行くことが決定した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5928z/

恋する気持ち

2011年12月26日01時48分発行